

伝承童謡

真鍋昌弘
下仲一功

伝承童謡は普通、わらべうたと呼ばれているものである。基本的には童（わらべ）の歌う歌謡ということになる。ただし、童謡に伝承ということばを冠したように、厳密には一致するものではない。

童謡という文字は古代においてワザウタと読まれ、世に起る出来事を予兆する歌謡という意味あいで使用された。したがって、これはここで扱おうとする童謡とはとりあえず別の歌謡と考えたほうがよい。と言うのは、そのワザウタとして機能している一つの歌謡の、その歌詞が本来どういふ場でのような人々によってうたわれてきたか、ということが問題になるからである。まだ不明な点も残

されており、一部の歌の実体があるいは当時のいわゆるわらべうたではなかったか、という説もある。また神が童の口を借りて予兆を象徴的に述べるという面からも、そこに子供という観念が介在している。ゆえにワザウタについては今回は考慮しないが、わらべうたと完全に無縁なものというわけではない。

また、童謡がわらべうたの意味で使用された期間は長い、近代にはいって近世以前の童謡とは違う、文芸的にもすぐれた童謡を子供に与えようと考えた人々がいた。彼らも自分たちが創作した歌謡に童謡の名を使用したため、現在では近世以前のものとそれらを区

別するため、それぞれ伝承童謡・創作童謡ということばが使われる（したがって、わらべうたは厳密に言うくと、この伝承童謡にあたる）。この創作童謡も、六、伝承童謡から創作童謡へ、の項でもふれる如く、実際にはわらべうたを土台にし、わらべうたの語句を取り入れた事例がすこぶる多いのであるから、このジャンルに関しても伝承童謡の理解なくしては不十分なのである。したがって創作童謡研究においても、伝承童謡との関係についての研究がなければならぬ。

本稿では主に伝承童謡の研究史を、ほぼこの二十年に絞って振り返る。その採集に関しては明治期のところまで溯った。また他の部分でも適宜選択して二十年以前にまでふれたところもある。創作童謡についても先にふれた事情から、口承文芸の研究に関連あると思われるものについてのみ記述した。

引用した諸論文は初出誌及び初出年月を記載したが、その後論集にまとめられている場合は初出を略し、収められた論集名、発行年、出版社を記載した。なお、一九八二年までの文献を書籍類・雑誌類にわけて網羅したものに本城屋勝『わらべうた文献総覧解題』（二〇〇〇 無明社）があり、便利である。紙面の都合上わらべうた集・研

究論考のほとんどを割愛せざるを得なかったが、本稿をもって動向と課題の第一段階としたいと考えている。後日ならかの形で続編を述べる予定であるが、これらが今後さらに伝承童謡の研究を進めるための、また新しく研究を始める方への指針となれば幸いである。

一、伝承童謡の採集資料

江戸期以前、わらべうたは多く随筆その他の資料に断片的に記録されていたが、江戸後期にそのみを集めたわらべうた集が現れる。例えば尾張では小寺玉晁『尾張童遊集』、朝岡露竹斎手録『子もり歌 手まり歌』、高橋仙果『熱田手毬歌 盆歌童謡附』などがそれであるが、江戸市井においては行智によって集められた童謡集『童謡古謡』は、歌を子守歌やあそびの歌、天象の歌などに分類することを試みており、研究史の上でも重要な意味をもつ。こうした近世期伝承童謡集は尾原昭夫が『近世童謡童遊集』（『日本わらべ歌全集』二七、1991）柳原書店に網羅して収めている。労作である。（ただし狂言歌謡からの選出などについては、疑問の場合も含まれる。）

明治期の収集については真鍋昌弘「明治期における伝承童謡蒐集について」（『日本歌謡の研究―閑吟集』以後）、1992 桜楓社）に述べられている。この時期にまとめられた資料としては、大和田建樹編『日本歌謡類聚』下巻（1998）、前田林外編『日本民謡

全集』『日本民謡全集統編』（1907）前田林外がこれらをまとめる経緯は、真鍋昌弘「歌謡と前田林外」（『日本歌謡の研究―閑吟集』以後）、1992 桜楓社）参照）、童謡研究会『諸国童謡大全』（1909）後『日本民謡大全』）がある。また明治三〇〜四〇年代に大久保肥雪が集めた『日本童謡全集』は七道の国々を順に記載しているが、残念なことに東山道・磐城以後が欠如している。同書は滝沢典子・真鍋昌弘によって「翻刻・大久保肥雪編『日本童謡全集』（第一回〜第五回）」（『学苑』五二五〜五六六号、1983.9〜87.2）として活字化された。また、歌詞だけでなく、その歌詞に伴う遊びをも詳述した大田次郎『日本全国児童遊戯法』（1901）も貴重であり、平凡社東洋文庫に瀬田貞二によって復刻された（1968）。この他東京のものに限られるが、岡本昆石編『あずま流行 時代子供うた』（1894、『続日本歌謡集成』五（1962）に復刻）もあり、さらに雑誌に連載されていたものとして、『風俗画報』（1886〜1916）、『児童研究』（1898〜1943）所載のものも見落としてはならない。大正期にはいつて高野斑山・大竹紫葉『俚謡集拾遺』（1916）があり、またこのころから各地の伝承歌謡がまとまって活字化されるに伴い、伝承童謡も多く記録されるようになった。墟辺叢書に収められる『熊野民謡集』（1922 郷土研究社）、『八重山嶋民謡集』（同）などいくつかがある。このような地域ごとの伝承童謡を集めようとする企画は以後盛んであり、昭和期にはいつて、現在に至るまで、各地の市町村誌所載分まで含めると数多く出版されていることになる。それらのうち稀覯本であり、かつ重要なものについては

『日本庶民生活史料集成』第二四卷「民謡・童謡」（真鍋昌弘編 1979 三一書房）に収められている。

昭和期にまとめられた資料に高野辰之『日本歌謡集成』巻十二近世編（1939 春秋社）、北原白秋『日本伝承童謡集成』（1947～50・1974～76 1974年版より三省堂）がある。前者は伝承歌謡一般も扱ったもの、後者は伝承童謡のみを集めたものである。後者は全六巻と分量も多く、手元にあると有益なものであるが、採集地の郡町村が記載されていない点が極めて残念である。日本放送協会の仕事として、仙台中央放送局から出版された『東北の童謡』（1937）は、その後曲譜集『東北のわらべうた』（1954）とともに武田忠一郎の労作である。同じく日本放送協会の出版した『日本民謡大観』（1944～1992）は文字通り全国の民謡を採集したもののだが、この中にも伝承童謡が多く含まれている。同書の1992年からの復刻版にはCDが付けられており、早くに消失した伝承歌謡を聞くことができる点、貴重である。なお、伝承童謡の楽譜化は広島高等師範付属小学校音楽部『日本童謡民謡曲集』（正・続、1933・35）の例にあるように戦前にも行われたが、多く戦後にまとめられた。これは録音機器の普及とその背景としている。藪田義雄・安倍盛による『日本わらべ唄全集』（1954 全音楽譜出版社、ただし編曲している。）はその代表としてあげられる。譜を伴い、歌詞の注解を行った本格的なものとしては町田嘉章・浅野建二『わらべうた』（1962 岩波文庫）があり、現在も手に入る。同書はわらべうた啓蒙の意味でも大きく貢献した。

最近まとめられたものとしては、『日本わらべ歌全集』全二七巻（1979～1991 柳原書店）がある。都道府県別の、曲譜をつけての編集で最近における大きな業績である。また文化庁の指導のもと、国庫補助を受けて発行されている緊急民謡調査の報告が現在も各都道府県から発行されているが、ここにも伝承童謡が多い。林友男『岐阜県わらべうたいまむかし』（1991 中邦印刷）も労作。

以上、伝承童謡の収集資料について概略を述べたが、昔話の研究における関敬吾『日本昔話大成』に相当するような整理がまだなされていない点が伝承童謡研究のまだこれからであることを如実に表しているように思われる。昔話・伝説とはまた質を異にするジャンルであるから、整理分類面でも困難が多いが、今後全国的な視野をもつ資料集の編纂も急務である。そのため、各地方で出版されたわらべうた集、つまり地方出版社から発行されたもの、高校・中学校がまとめたもの、郡町村誌の歌謡の項に提示されたものなどの多数の資料を蒐集し、総覧できるような大きな仕事が必要であるが、特に伝承童謡は曲節を伴うものだけにそれが持つ意味が大きい。小島美子の指摘（「書かれた民謡とは？」『日本庶民生活史料集成』第二四巻「民謡・童謡」月報（1979））にもあるように伝承歌謡の楽譜化には限界が伴う。口承文芸の研究には当たり前とは言え、やはり口承されるそのままの形を見る必要がある、その点で音声資料を添えての総合的報告は有益な方法である。最近の資料でも、例えば葛師のわらべ歌研究会による『葛師のわらべ歌』（1988）、伊丹政太

郎『遠野のわらべ唄』(1982、岩波書店)にはカセットテープが資料として作成されている。相当の困難は伴うと思われるが、今後全国的規模の音声資料の整理も是非とも行う必要があると思われる。ただし口承文芸研究においては、やはり歌詞を根本として、その広く多様な発想表現を、遊びや生活民俗の場・機能との有機的な関係において把握することを忘れてはならない。

二、伝承童謡の研究(一) 地域ごとの採集

次に、採集され、まとめられた伝承童謡がどのように研究されてきたか、また今後どのようにみていくべきかを考えて行きたい。

地域ごとにとどのような伝承童謡があつて、それらが他の地域に比較してどのような特色を持つかという研究は、昭和初期以来地域ごとの収集が行われるとともに始まり、現在も盛んに行われている。この何年かの国文学年鑑に掲載されたものから抄出しただけでも、井上隆明「秋田わらべうた集成(二〜四)」(秋田経済法科大学雪国民俗研究所『雪国民俗』八〜十二号、1980.12〜83.11)、堀場宗泰「静岡県の手まり歌(その1)―伊豆・県東部地方の手まり歌―近世・近代―」(『常葉学園短期大学紀要』十三号、1981.12)落合美代子「兵庫県のわらべうた―中の中の小坊さん―」(『兵庫女子短期大学研究集録』十六号、1982.3)、沢登美美子・照沢惟佐子「山梨のわらべうた(I)」(『山梨県立女子短期大学紀要』十七号、1984.3)、高木靖弘・仲野悦子「岐阜県徳山村の口承文芸に関する

調査報告(第16報)―上開田・戸入・下開田のわらべうた―」(『聖徳学園女子短期大学紀要』十号、1984.3)「岐阜県徳山村及びその周辺地域のわらべうたの伝播・伝承について(I・II)」(『同』十二号、1986.3)、柴田昭二・西岡ゆかり「香川のわらべ歌―その詞章の地理的分布について―」(『香川大学一般教育研究』三十号、1986.10)、矢口裕康「宮崎のわらべ唄とその伝承」(『宮崎県地方史研究紀要』一四号、1988.3)、酒井薫美「島根県のわらべ歌に見る地域性(I)―手まり歌編」(『島大国文』十九号、1990.11)など、数が多く、また全国に散らばっている。そのような中で、新たな試みとして一定地域内の伝承童謡を子守唄に限ってだがそれまでの分類法に加えて「悲しみ」「笑い」「恨み」という情感面で整理することを試みた小林輝治「加賀地方の子守歌」(『北陸大学紀要』六号、1982.12)や、愛媛県という一定地域内での十年間の変化を見ようとする研究、岩井正浩「わらべ歌の変遷に関する比較研究」(『金田一記念論文集』三、1984.7)、方に着目した梶浦鈴代「わらべ唄と方言―「やい」について―」(『日本女子大学大学院の会々誌』五号、1984.8)は地域的な特色を探るものである。

三、伝承童謡の研究(二) 役割・機能

第二次世界大戦後、伝承童謡の役割や機能ということに対する調査が進み、それぞれの歌がどのような形で歌われるものが随分研

究されるようになった。二、で示した多くの地域的研究もおおよそそれまでに行われた分類にしたがって整理されている。

分類ということをはじめた最初は冒頭にも記したように行智であったが、明治以後にまとめられた各資料にも、おおよそそういう時に歌われるものか、例えば「手毬歌」「子守唄」程度は記されていた。それらを体系的に整理するようになったのは、やはり民俗学の研究が進んだことによる影響がおおきい。今その詳しい経過は割愛するが、現在多くの規範となっているものは町田嘉章・浅野建二『わらべうた』（1962 岩波書店）に示されたもので、一 遊戯唄その一、二 子守唄、三 天体気象の唄、四 動物植物の唄、五 歳事唄、六 遊戯唄その二、七 囃し唄というものである。この分類に対して新たな分類を試みたものもあり、本城屋勝「わらべうたとは何か」（『わらべうた研究ノート』（1982 無明社）はその一例である。

これらの分類に従い、伝承童謡がどのような遊びや所作、背景を持って歌われたかを研究したものは少なくない。全般にふれたものとしては藪田義雄『わらべ唄考』（1961 カワイ出版）、浅野建二『わらべ唄風土記（上・下）』（1969-70 塙書房）、長野県の実態をふまえた『民間伝承集成 語り部の記録3 わらべ唄』（広川勝美編 1978 創世社）など。近年の研究傾向としては、それぞれの分類ごとにまとめられるものが多い。

遊戯唄については尾原昭夫『日本のわらべうた（室内遊戯歌編・戸外遊戯歌編）』（1972.75 社会思想社）が古く、小泉文夫の『子どもの遊びとうた』（1986 草思社）、四国の伝承童謡をもとに遊

戯法を詳しく解説し、その普及も目指す岩井正浩『わらべうた その伝承と創造』（1987 音楽之友社）、手まり遊びの実態から歌との関わりに至るまでを考察した右田伊佐雄『手まりと手まり歌への民俗・音楽』（1982 東北出版）などがある。また、遊戯に使われるそれぞれの唄についても、例えば護法飛に遊びの起源があるとされる「かごめかごめ」については、宗谷真爾「童謡「かごめかごめ」考」（『文学と教育』九号、1985.6）、「『かごめかごめ』補考」（『同』十号、1985.12）、桜井保之助「わらべうた『かごめかごめ』と日本人の八神ノ観」（『国際商科大学論叢（教養学部編）』三三三号、1986.3）、「ずいずい、ずっころばし」お茶壺道中起源説に一石を投じる西沢爽「ずいずい、ずっころばし私考」（『日本歌謡研究』十九号、1980.4）、など多い。

子守唄については、歌われた背景を探ることに焦点をあてた松永伍一『子守唄』（1976 中央公論社）、歌われた風土を随筆風にまとめた白田甚五郎『子守唄のふる里を訪ねて』（1978 桜楓社）などがあるが、唄を真正面から取り上げようとしたのが右田伊佐雄『子守と子守歌への民俗・音楽』（1991 東北出版）である。同氏は以前から「子守歌の分類と民謡における位置」（『わらべうた』十号、1973.5）をまとめており、その成果も踏まえて同書では、子守作業における歌唱習俗という観点から直接寝させ歌・間接寝させ歌・遊ばせ歌・守り子歌という分類を試みた。また具体例として「坊やはよい子だ」「五木の子守歌」「竹田の子守歌」「天満の市」「お月さんいくつ」の五つの歌の考察を行っている。なお氏以外に

も「お月さんいくつ」には、金関丈夫の広い視野に立った「お月さまいくつ」（『お月さまいくつ』1980 法政大学出版局）があつて有益である。

歳事歌についての考察は少なく、最近のものとしては、木村重利「歳事唄の性格・行事・遊び・芸能」（『國學院雑誌』八一巻十一号、1980.11）本城屋勝「歳事歌考」（『わらべうた研究ノート』1982 無明社）に見られるぐらいである。他、竹内道敬「わらべうた考—邦楽現行曲による—」（『金田一記念論文集』三、1984.7）は「お月様いくつ」「蝶々とまれ」「かごめかごめ」「雪やこんこ」の四つの歌について、近世邦楽との関わりを見ようというもの。また、伝承童謡の役割という点について考えさせられるものに伊丹政太郎『遠野のわらべ唄』（1982 岩波書店）がある。同書は菊池カメが阿部ヤエに伝えた百奈の伝承歌謡を筆者がまとめたものであるが、阿部ヤエは菊池カメに歌謡の正当な伝承者と見なされ、歌々に秘められる意味やその役割をも同時に教えられたという。ここでは教育的機能が明確で、このようなある方向性をもった、意図的な伝承も存在したことは注意しておく必要があると思われる。なお伝承童謡の教育的機能については、木村宏子・笹森建英「わらべ歌と性教育」（『弘前大学教育学部教科教育研究紀要』二二号、1990.10）もある。

四、伝承童謡の研究(三) 音楽面

伝承童謡が歌謡であるからには、当然それには曲節が伴う。楽譜を伴う伝承童謡の紹介は多いが、しかしそれについての純粹な研究は以外に少ない。その中で小泉文夫『日本伝統音楽の研究』（1958 音楽之友社）、『わらべうたの研究』（1969 わらべうたの研究刊行会）の存在は大きい。尾原昭夫は「日本民謡における特殊旋法の分布について—五木型の子守唄を中心として—」（『日本歌謡研究』九号、1970.2）において、一般の民謡にみられない旋律上の特色を子守唄に見いだした。また松沢秀介は渡辺富美雄主催の民謡科学研究会のメンバーとの共同研究によって、新潟県の中部地域を中心とした調査に基づき「子守り歌の旋律と音階構造の研究—その類型化の試み—」（佐藤正人と共著『日本歌謡研究』十七号、1978.4）などを発表、その成果は渡辺・松沢『子守歌の基礎的研究』（1979 明治書院）に「上越地方における子守歌の考察」などと共に収められた。また、中山明慶も鳥取の伝承童謡をもとに曲節の研究を続けて「わらべうたの研究(Ⅳ)—ヴァリアントと地域性の関連について—」（『鳥取大学教育学部研究報告(人文社会)』三四号、1982.10）、「わらべうたの研究(V) 語調とメロディーの關係について(1) 鳥取県東部の数の唱え方の特徴について」（『同』三六一号、1985.8）などがある。

伝承童謡のもつリズムを曲節・旋律よりもっと下層に求めたもの

として、鷲津名都江『わらべうたとナーサリーライム 日本語と英語の比較言語リズム考』（1992 晩声社）がある。副題の通り、本来は比較言語学からの研究である。

五、伝承童謡の研究(四) 深層へ

伝承童謡という用語についても一度ふり返ってみると、それは「伝承」されてきた「童」の「謡」（歌）であった。そこで伝承童謡の研究の最後に日本歌謡史の中に位置づけた研究をみておきたい。志田延義「伝承童謡」（『志田延義著作集 歌謡圏史Ⅱ』1982 至文堂）は早くその先鞭をつけたものである。すなわち伝承童謡の培養を風俗圏・今様歌謡圏に見、童謡の初見を『讃岐典侍日記』の「降れ降れこ雪」であるとした。氏は続いて子守唄の初見、わらべ歌、と論を進め、最後にわらべ歌雑考として三つの歌謡について考察を加える。ここで行われた方法は歌謡の発想の方法、表現の類型の徹底した比較・調査であり、時代性・地域性とも広い範囲を見据えた上での論の展開である。この志田延義の方法で童謡、歌謡史研究として書かれたものに、吾郷寅之進・真鍋昌弘『わらべうた』（1976 桜楓社）がある。ここでは伝承童謡全般にわたっての考察が行われた。すなわち遊戯歌・大黒様に始まり、子守歌、動物植物の歌、天体気象の歌、歳時歌計二十九の歌に対してアプローチしたものである。歌謡研究の立場から伝承童謡を論じたものでそこには今後の課題が多数指摘されている。

歌謡研究の立場から伝承童謡を今後どのように考えて行くか、一九八六年に真鍋昌弘が熱田神宮文化講座で「わらべ歌の世界」という講演を行った際の講録集（第七）に、それがおおよそ示されているように思われる。すなわち末尾で講演の内容をまとめた部分に①「伝承童謡を抒情的に見るのではなくて、その機能・場を必ずおさえること、②難解語句を解きほぐすことによって背後にある伝統文化を見て行くこと、③古代から近現代に至る日本人の物の考え方、生活民俗の発想の仕方がそこにあるということ、④伝承者の問題について触れ、これらに⑤メロディ・リズムの問題が加わると、「童謡の総合的な全体像を明らかに出来る」というのである。民俗学からの視点や方法であり、実体を主とする歌謡史からの接近、加えて音楽的アプローチということになる。いずれにしても今後はある一方からの照射ではなく、複数の視点から伝承童謡を捉えることが必要であると思われる。

例えば、天象や動植物に関する伝承童謡が、歌というよりむしろ呪的な唱え言的性格を強く持っていることを考えあわせれば、伝承童謡というジャンルに対して、今後、より自由なアプローチが必要となるであろう。（そうなればもちろん「伝承童謡」という用語や概念そのものを考え直さねばならないが。）このあたりも伝承童謡の成り立ち・範囲を考えて行く手がかりであって、興味深い。

六、伝承童謡から創作童謡へ

さて、最後に口承文芸と関わりのある部分に限り創作童謡についても触れておきたい。はじめに述べたように明治以後、多くの創作童謡がつくられ、その普及が試みられる。しかし、その初期においては、現在のように伝承童謡との差異が大きいものではなく、多くの創作童謡作家はその創作の根底において伝承童謡を意識して作品を作りあげていった。畑中圭一は「童謡論の系譜をさぐる」と題した論を『こどものうた』に連載したが(1984:5~1989:11)、それをまとめたものが『童謡の系譜』(1990 東京書籍)である。各論において、野口雨情、西条八十をはじめとして、与田準一、小林純一に至るまでの童謡論の軌跡をたどるものである。多くの作家がどのような作品を残したかは、滝沢典子の一連の研究が注目される。採集資料の項でも少し触れたように氏は明治期の伝承童謡収集の状態の研究も進めており、それを踏まえた上での研究は注目すべきである。論に「創造期の『赤い鳥』童謡」(『日本歌謡研究』十三号、1974.3)、「三木露風の童謡の諸傾向」(『学苑』四三三三号、1976.1)、「三木露風の童謡の日本的と西欧的傾向」(『同』十六号、1977.3)、「若山牧水の童謡」(『同』十七号、1978.4)、「野口雨情の童謡」(『同』十八号、1979.4)、「島木赤彦の童謡」(『同』十九号、1980.4)、「女流作家の童謡」(『同』二二号、1983.9)がある。また三木露風「赤とんぼ」の研究は家森長治郎によって統

けられ、「童謡『赤とんぼ』考」(奈良教育大学『国文』研究と教育』四号、1980.5)、「童謡『赤とんぼ』—名曲の誕生と解釈の問題」(『歌謡』研究と資料』三号、1980.10)などの論考にまとめられた。若井勲夫は「童謡・わらべ歌評釈」(京都文京短期大学『研究紀要』二三号、1984)で「赤蜻蛉」「七つの子」「背くらべ」・唱歌「雪」、伝承童謡「かごめかごめ」「通りゃんせ」「花いちもんめ」にふれる。古歌謡が作家に与えた影響をみるものに坪井安「現代童謡における古謡の香気—八十童謡の意味するもの—」(『日本歌謡研究』三二号、1992.12)がある。

なお伝承童謡が近代作家に与えた影響やそれを取り込んだ作品をみたものに、小林輝治「鏡花における伝承童謡の受容—「花折りに」を中心に—」(『日本歌謡研究』二五号、1986.2)、真鍋昌弘「民謡・童謡と泣菫」「雪国」の二つの俗謡」(共に『日本歌謡の研究』「閑吟集」以後—1992)などがあり、新しい研究の一つの方向を示唆している。

(著書・論考・資料等については、多くの遺漏があるものと思われる。後日機会を見て補遺を行いたいと思う。)

(まなべ・まさひろ／奈良教育大学)

(しもなか・かずのり／甲南大学非常勤講師)